

香能古博物館だより



孔子像 亀陽文庫蔵

銅像 時代「明末清初」(推定)  
34・1櫃

孔子をまつること

翠川文子

(東京・川村短期大学助教授)

「能古博物館だより」第十号・第十一号に載せられた庄野理事長の

『亀井少栗伝』(十)と(十一)

に亀井昭陽の手記『空石日記』から引用した次の記事が紹介されている。

「聖像(孔子像)」

に香を焚き、昭陽は山人がわが家に入る祝福を祈

拝する……

供進の神酒を祭壇から

下げ……盃を廻しながら祝詞を述べさせ、式

事を終えた。聖像を書斎の厨子に移す」(第十号)

「長男義一郎は、大福茶を祀堂(孔子聖像を安置)に献じる。これに在塾で越年した書生たちは義一郎の背後に列座、拝礼した」(第十一



田原藩成章館の孔子像。唐の呉道子筆像に倣う渡辺華山筆。愛知県田原町巴江神社蔵華山会館寄託。

号)

この二つの記事から、亀井家の書斎には厨子に納められた孔子像が安置されており、元旦やそのほか事ある時には別に設けた祭壇に据え、供物を供え香を焚き拝礼をしたことが知られる。儒者の家である孔子をまつことは当然のことといえるが、実はこの孔子をまつことは、わが国では古く上代にまで

さかのぼるのである。

弘法大師の命日から毎月二十一日

に、菅原道真の命日から毎月二十五日にそれぞれ関係寺社でまつる行事があるように、孔子の場合も日常的な拝礼とは別に特定の祭日があった。

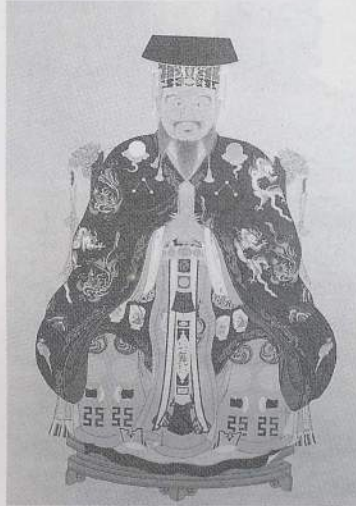
写真：杉山謙

能古博物館だより

それは命日でも生誕日でもない一月・八月の最初の丁(上丁)の日である。この日のまつりを積奠・積菜(供物の簡略なもの)またその祭日から丁祭・上丁祭ともいう。実はこれは孔子以前の中国古代の儀式制度に起源があり、『礼記』によれば、積奠は特定の人を祭るのではなく、学問・技芸など時

には戦術に 松山藩里仁館孔子像。冕冠像。山形県松山町資料館蔵。

の国の学芸の祖ともいうべき先聖先師をまつるものであったらしい。その名称は、『礼記』の「王制」の注に「積奠」とは「(供



さらには先聖が孔子、先師が孔子の弟子の顔子に定着したのは唐代初期の顕慶二(六五七)年以降のようである。なお、のちに明代になって先聖先師は孔子一人を指すこととなった。積奠を行う日は、『礼記』には二月の上丁のほか四季の定まった日と天子入学など臨時の日があったことが記されている。この祭日は時代によって異なるが、隋代には国子寺(中央の大学)では定例の積奠は仲月つまり一・五・八・十一月の上丁に、地方の学校では一・八月に定められていた。

物)菜を積き弊を奠きて先師に礼す」とあることで命名の由来がわかる。儒子が前漢武帝の時に国学となつてからか、またその前からか、この学祖に儒家で理想の君主とする周公旦や孔子・顔子そのほかの人々が加わり、やがて魏晉頃から、先聖先師は儒教関係に限られるようになり、

『隋書』「礼儀志」。唐代には『永徽礼』の頃(六五〇年代)までに、全国の皇城の孔子廟建設が推進されると共に中央・地方ともに積奠は二月・八月の上丁に定まり、学校関係の規定の中に明文化されて、学校制度とともにそのままが国の法規程の中に取り込まれた。そのことが確

認される最も古いものは『永徽礼』の影響と考えられ、七〇一年に施行された『大宝令』の「学令」である。現存する『養老令』の「職員令」「学令」には次のように記されているが、傍線部分は「令集解」の中の「古記」から既に『大宝令』にあったと推定されている部分である。

「大学寮。頭一人、学生を簡試すること、及び積奠のことを掌る」

「凡そ大学・国学は、毎年春秋二仲の月の上丁に先聖孔宣父(孔子)に積奠せよ。その饌(供物)・酒・明衣(祭祀の服)に須るむ所は、並びに官物(国庫のもの)を用ふるよし」  
ただし「家伝」下に載せられた慶雲二(七〇五)年二月の積奠の祭文(祝文)から「先聖」の部分は『大宝令』ではまだ「先師」であったと考えられる。

当時の大学は官吏養成機関また計数・書などの専門家の養成機関であったが、中国に倣って必修科目のテキストとして孔子と弟子の曾子の孝に関する問答を記した『孝経』と、孔子と弟子達の言行録である『論語』が用いられ、一般官吏に進む者の選択科目のテキストとしては、『周令』『儀礼』『礼記』のほか孔子の注が付けられた『周易』、孔子が編纂に関

与したとされる『尚書』『毛詩』『春秋』が用いられた。学校におけるこれらのテキスト使用は上代・中古の大学・国学だけでなく、中古の私学、近世の藩校までも続くのである。このことから何故大学でまた後世藩校などで孔子をまつったかが納得されると思う。

孔子のまつり、積奠が記録に初めて見えるのは、大宝元(七〇一)年二月(『統日本紀』)であるが、天智天皇の時すでに学校があったという(「懐風藻」序)から、もう少し前にさかのぼるかもしれない。この積奠は七〇一年から平安時代末の安元三(一一七七)年大学寮が焼失するまでそで行われ、その後は再建されることになかった大学寮に代わり、太政官庁に場所を移して応仁の乱直前の一四六〇年代頃まであわせて凡そ七六十年間にわたって行われたのである。この時点で途絶えた理由は、孔子崇敬の念の衰微ということではなく、恐らく武家政権下における朝廷方の経済的な困窮によるもので具体的には建物の破損、経費調達不能、人員確保不能などであったと思われる。この公の行事としての積奠以外に貴族の家における私的な積奠も中古・中世には見られ、特

## 能古博物館だより

(3) 第14号

に三条西家では応仁の乱後、積奠途絶後ほぼ四十年を経た千五百年代に凡そ三十年にわたって二月・八月の上丁に公卿・大学寮関係者を招き孔子をまつりその前で詩会・聯句会を行っている。  
なお地方の国学では大学より縮小された規模で  
積奠が行われ  
ていたが、平  
安時代中期頃  
までに国学の  
廃絶とともに  
おこなわれな  
れなくなったと  
考えられる。  
応仁の乱直  
前に途絶えた  
朝廷方の積奠  
であるが、そ  
の後新儒学の  
伝来とともに  
これを学ぶ場  
での積奠が散見するようになり、近  
世になっては、幕府・藩の学校、儒  
者の家などで広く全国的に孔子をま  
つり、積奠を行うことは行われたが、  
明治維新から廃藩置県にかけての廃  
校によってほぼ終止符をうった。そ  
の後明治末期頃より各地で積奠の復

湯島聖堂の孔子像。司寇像。関東大地震に焼失。  
新海竹太郎模刻。



活を見たが、第二次大戦を境に断絶し、現在では数箇所で行われるだけとなっている。

積奠の内容は、神前に供物を供え、終わって席を改め形式的な会食や供物頂戴、経書の講義、論議、詩を作

り披露するなどのことが行われた。  
供物について  
は、中国のよ  
うに牛豚羊な  
どを供える習  
慣のないわが  
国であるから  
修正が加えら  
れ、平安中期  
には相当和風  
になったと思  
われる。  
また武家政  
権下の朝廷で  
は経済的な逼  
迫から供物は  
ひどく簡素に  
なっていた。

まつられた聖像は、大学・太政官  
庁においては画像(孔子と顔子ほか  
十人の弟子)が用いられたが、どの  
ような姿であったかは特定できない。  
中世末期以降の武家社会にあつては  
画像・木像・銅像など様々な像のほ

か神位を用いる所もあった。この期  
の孔子像は、中国・朝鮮から将来さ  
れたもの、日本で作られたもの描か  
れたものがあり、その数は藩校・郷  
校・家塾の数を考えれば数百にのぼ  
るはずであるが、筆者が見ることが  
できたのは八十点あまりである。そ  
の姿は写真のように立像・倚座像・  
座像があり、頭には諸侯また文宣王  
として尊崇された孔子を示す冕冠を  
かぶるもの、司寇(法務大臣)であ  
った孔子の姿をイメージすると思わ  
れる冠をかぶるもの、その他さまざ  
まの冠、また布製の頭巾のものがあ  
り、持ち物では剣を帯びるもの、圭・  
笏を手にするものがあり、服装もさ  
まざまである。過半数の像に見られ  
る特色として、孔子が「駢齒」だっ  
たという言い伝えから大きめの前歯  
二本が見えることがあげられる。  
筆者は毎年四月第四日曜日に行わ  
れる東京の湯島聖堂(江戸幕府の聖  
堂)の積奠に供物の担当をさせてい  
ただいている御縁で全国に現存する  
主に藩校関係の積奠の記録を収集し  
併せてまつられた聖像の調査を行っ  
ている。やがて湯島聖堂が積奠資料  
のセンターになればと願っているの  
であるが、今回佐賀県多久市郷土資  
料館の尾形館長の紹介で能古博物館

の孔子像を拝見した。中国伝来のも  
ののことであるが、亀井南冥を初  
めとする亀井家の学問の研究と資料  
発掘を行い亀井学の顕彰を行う亀陽  
文庫がこれを所蔵されることはまこ  
とに運命的なものを感じる。亀井家  
の孔子像の所在のわからない現在か  
つて亀井家の書齋にあつて主のさま  
ざまな思いを見つけてきた孔子像の  
あつたことを思い出させるからである。  
孔子は不遇の人であつた。しかし  
その教えを後世に伝えた弟子、そし  
てその教えを二千五百年後の今日ま  
でさまざまに展開させた後継者たち  
を得た幸福な人であつた。  
亀井南冥もまた不遇な人であつた。  
しかし勝れた子孫を得、またその教  
えに共鳴し特定の儒者の顕彰団体と  
しては全国唯一の亀陽文庫を企図し  
実現した真藤慎太郎翁・庄野寿人氏  
を得た。  
愛(仁)の心で万事に対し文化と  
己を高めること、平和な世界の実現  
は教育を受けた者の責務と考える孔  
子の教えは、亀井学のフィリターを  
通していま能古から発信されている。  
博物館に南冥の孫の少栗画「於多福  
図」に足を止める多くの人々を迎え  
て南冥は多福の人となつたといえよ  
う。

## ◎亀陽文庫の

## 「孔子像」

亀陽文庫 庄野 寿人

能古博物館収蔵庫の一隅に、釈迦如来、不動明王、役の行者の木彫像、これに柿本人麻呂像（鑄銅）と一緒に孔子像（鑄銅）を保管していた。

九大・中哲研究室の「連清吉」先生に孔子像の鑑定を願うため、本館事務室の中央机に移し、そのままの状態が続いていた。この間、佐賀県立美術館学芸課長時代から長い御交際をいただきご退任後はご郷里の多久歴史資料館長になられた尾形善郎さんの訪問を受けたことがある。机上の孔子像を一見されるとは知らなかった……と。

これを、あまり気にもとめず、以上の言葉だけ耳に残っていた。

その後、電話で「全国的に孔子像と積奠など専門に研究される東京、川村短大の翠川（みどりかわ）先生に連絡を入れたよ。都合では、孔子さんば見に来なされるのでよろしく。孔子さんは是非ともお目にかけるよ」と、念押しされた。

尾形さんの多久は、昔から孔子さんで名高い町、さすがに尾形さんは

全国視野でこちらの孔子さんの世話をされるのかなあ、程度の印象で受けとめた。

その後、ご紹介の翠川先生訪問予定日を告げられたが、これも深く考えず「お待ちします」と答えた。

八月十九日、九時半に翠川文字先生ご来館、名刺で「川村短期大学助教」と知る。まだお若い先生。

文庫の孔子像は、そのままに置いてあるので、すぐご覧いただいた。

「歯がありますね。孔子さんです」そう聞くと、上前歯の下が心なしに少し見える感じである。

失禮にも、すぐ「歯があると孔子ですか」と、質問した。

「そうです。極め手になります。孔子さんには、顔子、曾子など、お弟子さんの像も多く、いずれもよく似た格好で、各像がバラバラになると、どれが孔子さんかわからず置き違ひもあります」

以下、孔子と門下の十哲像など詳しく説明いただき、積極的にお尋ねもして、閉館時刻まで、孔子像と各地の状況など知識を得た。

鑄像の孔子像は、翠川先生の現況調査で全国に鑄銅二十八体、ほかに木像が二十二体、陶製像一体、計五十一体、すべて各所蔵者、材質形態、

大きさ、など付表にされた研究論文を頂戴した。

「わが孔子像は、鑄銅の存在で全国二十九体となる仲間入りをしたわけですね……」に、うなづかれた。

こうして見ると、わが孔子像は（以下、聖像と称す）は形態とともに全国に伍して劣るものではない自信を得た。像高も三十四・一cmで小さくない。

翠川先生のご寄稿冒頭にある通り亀井家に聖像の存在がわかる記事が昭陽『空石日記』に多々見られ、事

ある毎に拝礼の事実が記録されている。最初の聖像は、寛政十年の大火に焼失したに違いなく、昭陽代の聖像はその後に入手したと考えられる。

余談になるが、亀陽文庫を開設し南冥・昭陽全集の企画を進めるため江戸期の儒者資料を買いあさった時期がある。大久保という訪問販売をする老人がいて、目も利いており軸物など良い掘り出しもしたようである。某日、これは亀井の孔子像だと持参。石彫の立像で作も良く気品もある。二十糎高で火災がうかがえた

が、疵はなかった。まだ孔子像の実見が浅い時でもあり買わなかった。老人は残念そうな顔を見せ、暫く八幡の甥に預けておく。気が向いたら、又持ってくる、と帰った。

その後、老人の死と共に右の石像は縁を失ってしまった。

いまの文庫聖像は、大分市の有名古書店による。

尾形館長、翠川先生のお蔭で、文庫聖像も世に出る機会を得た。

最近、九大中哲に文庫聖像と翠川先生の話を報せに行き、町田教授から戦前の国内各地の聖像と聖廟の紹介写真集を見せられ、現に借用中である。

これに、多久の「孔子の里」出版にかかわる「時空を越えて孔子と現代」と翠川先生論文を何度も読むにつれ、「時空を越えて」が痛感させられる。

聖像の受難がなんと多いことか。江戸時代の火事、紙と木の日本建築によるせいもある。

一方では、明朝亡命で有名な逸話になった朱舜水が将来した聖像のように三体とも今に伝わる強運のものもある。即ち一体は柳川に、一体は彼を後援した安東家に、一体は湯島聖堂に現存する。しかし、多くの像は薩藩置県に際し、また第二次世界大戦の空襲に、また、度重なる火災の中に失われていったのである。日本の木造建築の宿命であろう。この中で現存する鑄像二十九体の存在は重々しく思われるのである。

文庫聖像は、まず保存と安置に必

要な厨子をつくらねばならない。

次で、聖廟が必要である。これは小さくとも別棟にし背景に丘陵林が望ましい。… 積奠も実行する。

積奠は、学祖孔子とその徳を祭り、我々の学問成就、政治と明るい社会をつくる論語精神の祈願である。幸いに「孔府料理」という食文化を供え、参列者も享受する文庫祭りとして年々の催事にすることが出来る。

亀陽文庫は、亀井学の研究と顕彰を第一義にするが、孔子像を伝世し、南冥・昭陽父子の「論語語田」を能古の里から広くすることも立派な行事になる。

## 能古博物館だより

孔子が各地を巡回する中で「地域の食菜」を知り、その特長を伝え、後世これを「孔府菜」と呼んだ。それは王侯の接待から広く庶民に影響を及ぼした。決してぜいたくなものでなく、各地の風味を伝えている

「食不厭精(食、精をいとわず)、膾不厭細(膾、細きをいとわず)」また「唯酒無量: 不及乱」(酒、用いるもよし。乱れるなかれ、と。)(論語郷党第十)に述べられる。

要は、地域における野の菜、海のもの、食これを上手に使うこと。酒もよし、ただ乱れるなかれ、と。

## 能古焼諸資料

### 紹介と解説

佐賀県立九州陶磁文化館(有田町)に於て平成四年度特別企画「福岡の陶磁展」が開催中(11・15まで)である。同展特色の一つは、地元福岡がすでに著明、或いは一般に知られない諸窯の歴史事実が製品展示により納得され、図録により各窯の構造など、詳細を教えられることが多い。同展企画を担当された主任学芸員と同館あげての努力がよくうかがえる。

また、同展に当館収蔵の高取焼展示と当館域に存在する「能古焼古窯」(市指定史跡)の出土品および調査記録も図録に登載されている。

これを機会に本誌も、かねて市調査の記録と文献資料、とくに佐賀藩が自領有田窯の逃亡陶工に対する追跡を他藩領にまで及んだ記録と解説を述べることにする。

まず、福岡市調査を次に掲げる。

### 能古焼の古窯跡調査記録

#### 一、はじめに

能古焼の古窯跡は福岡市西区大字

能古寺脇五〇六番地にある。昭和六十三(一九八八)年、能古博物館の依頼により九州大学文化史研究所の田崎博之氏が昭和六十三年十月から十二月にかけて発掘調査を行ない、二七〇㎡を発掘調査した。

平成二年三月にこの窯跡を福岡市文化財史跡として指定される。この指定に携わったことである。この資料分析を行う機会に恵まれ、田崎氏の記録と共に文献史料(註一)での裏付けができる史跡である。

#### 二、位置と周辺の遺跡

能古島は博多湾に浮かぶ東西一・八km南北三・三七kmのヒョウタン形の形状を呈し、面積約三・七kmを測る。古窯跡は福岡県福岡市西区大字能古寺脇五〇六番地に位置し、能古島の南東側の山麓斜面上にあり、南東へ向かって延びる丘陵の先端付近に営まれている。国土地理院発行の五万分の一「福岡」「N11521011福岡11」の左上から下に二三・一cm、右に11cmの北緯33°36'東経約一三〇18'30"に位置する。

能古渡船場より北西約一kmの標高二十三mから二十八mに位置し『福岡市文化財分布地図』(西部Ⅲ)の「能古南部一〇一」に能古焼古窯跡

として掲載されている。周辺には能古遺跡群、弁当貝塚、烽址、鬼塚古墳、早田古墳群や浦の城址、東ノ城址箱式石棺墓等の遺跡が分布している。また、能古白鬚神社おくんち行事(市無形民俗文化財)、石橋家廻船資料(市有形民俗文化財)等の文化財が豊富である。

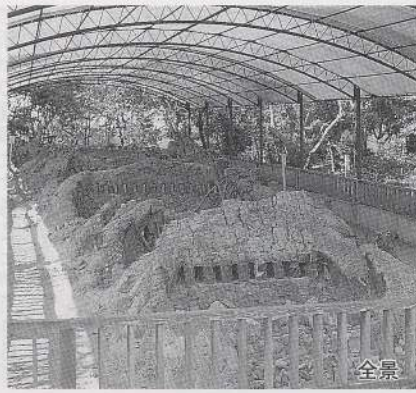
#### 三、遺跡の立地

古窯跡は能古島の南東側の山麓斜面上にあり、南東へ向かって延びる丘陵の先端付近に営まれている。かなり古くから天井部が崩落した状態で露出していた。窯跡の南にある永福寺には、素焼き段階の小碗が一点保管されている。これは、窯跡付近で採集したものという。さいわいに、採集地点を確認できたが、周辺が畑に開墾された折に地山面まで削られたようである。他の遺物は採集できなかった。また、物原とされる南側及び焚口下端は戦前からの畑作開墾によりその痕跡を留めていなかった。

今回の調査では、露出している窯跡の発掘に調査の重点をおくこととし、窯本体の主軸を中心として幅十m、長さ二十八mの調査区を設定した。

四、文献史料

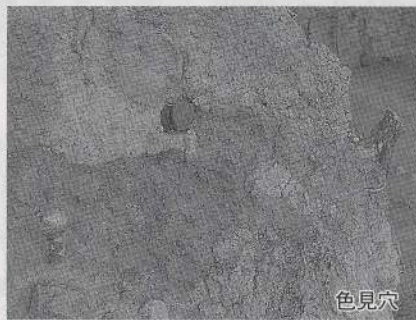
能古焼古窯跡は貝原益軒の『筑前国統風土記』「元禄十六(一七〇三年)には記述はなく、加藤一純が寛政十(一七九八)年に書いた『筑前国統風土記附録』に「明和の頃より此嶋にて陶器を製す。」(残嶋の項記載)、さらに青柳種信によって文化年間から天保年間(一八一四年頃)



にかけて書かれた『筑前国統風土記拾遺』には「此寺の上の山に陶器をつくる土あり。天明初年此土をとりて製せしか、いく程もなく其事止みたり。」とある。

また、『筑前町村書上帳』早良郡(四)の能古島の項に「天命初年之頃此嶋にて製候、五ヶ年程ニ而相止土ハ神王寺上ノ山より出候、葉ハ天

草より買入候由。」と記載されている。このほか、天明七年(一七八七年)の頃に有田の『皿山代官旧記寛書』に、「一、一筆啓達候、筑前残嶋・須恵両山へ有田筋より佐十郎と申す者、焼物細工に罷越し居り候段、相聞き候に付、捕方のため、下目付共差し越され候処、…後略」(註)と記載されている。



以上の文献史料からは明和・天明頃の短い期間に能古で陶磁器が生産されたことが記載され、発掘調査の結果、出土した遺物もそれを証明するものであった。

五、窯 跡

昭和六十三年十月の発掘調査結果から窯本体は、焚口部・焼成室七室

を含む八室構造の連房式登窯である。窯跡の前面はほぼ平坦に削られ、窯尻の後方には馬蹄形の溝がめぐる。また、窯跡の南半分の両側で溝状遺構を検出した。窯本体の全長は二十二m、窯尻後方の馬蹄形の溝を含めると二十六・五m、此高差五・二mをはかる。主軸方向はN-72°50'Wである。ただし、窯全体が三室を境

として南へわずかに屈曲しているため、一〜四室はN-69°W、五〜七室はN-72°Wと主軸方向にズレがみられる。

焚口部は、窯の前面から三〇cmほどの高さに削り出して、旧表土の上に五〜十cmの厚さに粘土を貼って床面を作っている。平面形は胴ぶくみの長方形を呈する。主軸は一・七六m、中央部幅二m、奥壁幅一・六八mを測る。床面は西に向かつて若干傾斜する。奥壁は石積みで高さ三〇cmに築造され、その上に一との間のサマ口が磚で構築される。

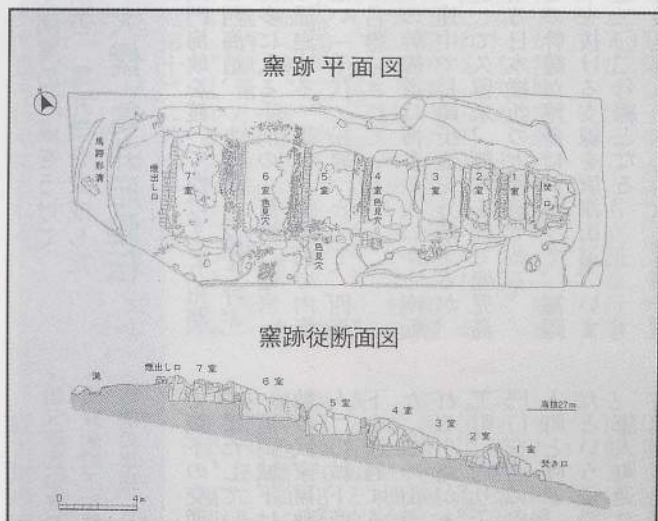
各焼成室の平面形と規模は以下の

(単位 m)

焼成室	平面形	主軸長	前壁幅	奥壁幅	中央幅	奥壁高
1 室	胴ぶくらみの長方形	1.32	2.16	2.4	2.68	0.32
2 室	胴ぶくらみの長方形	1.56	2.8	2.88	3.2	0.4
3 室	胴ぶくらみの台形	1.96	2.8	3.2	3.32	0.48
4 室	胴ぶくらみの長方形	2.4	3.6	3.52	4.0	0.72
5 室	胴ぶくらみをもつ台形	2.64	3.76	4.28	4.48	0.8
6 室	胴ぶくらみをもつ台形	2.96	4.4	4.8	5.04	0.88
7 室	胴ぶくらみをもつ台形	3.16	4.95	5.28	4.86	0.92

とおりである。

焼成室はいずれも南側に出入口を設けている。床面は西(焚口部)に向かって傾斜するが、大部分は攪乱を受けていた。火床と砂床に分けられ、一・二・五室の砂床では黄白色を検出した。火床の幅は一〜四室で三〇〜四〇cm、五〜七室で五〇〜六〇cmを測る。奥室は一〜四室が石積みで構築されるのに対して、五〜七室の奥壁は磚積みで構築されている。ただ上部(第五〜七室)は主軸が北側にずれ、焚口から右側にカーブを呈する。焼成室も第一室から第七



(福岡市 作製)

に向けて次第に大きくなり、第一室では一・三二m×二・六八mに対して第七室では三・一六m×五・二八mで、約二倍となっている。壁体の遺存状態は比較的良好で、高さ〇・七〜一・六mほどが遺存していた。壁体の厚さは基底で六五〜九〇cmで、第六室を除く全室の南側にある側壁に色見穴があることを確認した。壁体内部には磚や窯道具が塗り込められ、壁体の修復が繰り返されたことが窺える。

窯尻部は扇形にひらき、扇側にあたる部分には転石や割石が乱積みされ補強されている。七のサマ口の後に磚を並べ、煙出しを造っている。窯尻部後方の馬蹄形の溝は幅一・六m×一・九m、深さ四〇cm×五〇cmを測る。焚口部から四室の両側は溝状に掘り窪められていた。特に、南側の溝状遺構の中には多量の瓦礫や陶磁器・窯道具の破片で埋められていた。土層観察すると溝状遺構の中は一度階段状に整地されたようである。

その上面に多量の瓦礫が堆積していた。

#### 六、出土遺物

遺物は窯跡の焼成室内部、南壁の外側の遺物溜り、および調査区南側の溝状遺構の三カ所から集中して出土した。窯跡の焼成室内部では窯体が崩落した瓦礫層の下から陶磁器・窯道具の破片が出土した。

また、第六・七では火床部分を中心として窯道具が散乱した状態で出土した。南側の外側の遺物溜りは、焼成室内から窯道具が掻き出された状態のもの、窯体に窯道具が立てかけられた状態のものに分けられる。陶磁器の破片は少量しか含まれず、窯道具がほとんどであった。出土遺物の内でもっとも量が多いのは窯道具である。つづいて陶磁器が多いが、その大部分が有田焼系の染付で、碗・湯呑碗・小皿・中皿・蓋・紅皿などがある。特に皿類は、見込みに昆虫紋様を手描きし、蛇の目高台に一重もしくは二重の方形枠内に「渦福」を記するのが特徴的である。

この手法は有田焼の主流ではなく有田焼系とされる有田周辺有田外山と称される筒江窯の手法で、文献資料『皿山代官旧記覚書』に記載されている事柄と一致する。このほか陶器があるが、これは高取焼系のもので、一〜二割を占める。この窯から基本的には日常雑器が生産され、磁器と陶器が同時に焼成されている。遺物の時期は一六世紀後半に比定できる。この他、焼成室内部から銅銭(寛永通宝)が5枚出土している。

能古焼古窯跡は文献史料からも発掘調査の結果からの江戸時代中期後

半(明和・天明頃)に陶磁器を生産した窯で、その主流は有田焼系の磁器と高取焼系の陶器で、主に日常雑器が生産されていた。江戸時代中期後半に開窯され、有田焼系の磁器、高取焼系の陶器を焼成した福岡市内で唯一残された古窯跡であり、窯の保存状態も非常に良い。

これから能古から焼かれた陶磁器が福岡市域内からかなり出土していることが、能古古窯址が発見されたから判明した。今まで有田焼としていた磁器の中から数多くの能古焼が発見されている。

詳細には胎土分析を行なう必要があり、現時点では資料の蓄積をまわって能古焼と有田焼(有田外山)との比較検討をいざ行いたい。

能古古窯址についてはいざれ詳しい報告が出版されると思われるので個別の内容は報告に譲るとして、肉眼的観察による福岡市域内で発見されている能古焼を出土する遺跡は、有田遺跡群、原遺跡群、太田遺跡群、吉武遺跡群、博多遺跡群がある。

発掘調査を依頼した田崎博之氏は現愛媛大学助教授に転じられた。本記録は市教委主任文化財主事二宮忠司氏。

註一、註二とも本誌次号にする。

能古博物館だより

父南冥の悲運をうけて  
刻苦 亀井学を大成した  
大儒 亀井昭陽伝 (一)

- ・祖父聽因の先見
- ・亀井家城下に移る
- ・昭陽の出生

但し、両番所とも非常の以外は特別に往来を看視しないが、この両架橋によつ

関門海峡を渡って西行する九州路昔は西海道、いま国道三号線と呼ぶ。博多に入る手前の「筥崎八幡宮」前を通過する一帯は、博多湾の内海に沿い「千代ノ松原」として、西海道の名勝にされている。

この幹線道は博多の入口から南転し、途中で長崎街道を分岐するが、直進して久留米、熊本を経て鹿児島に至る日本縦断の大幹線である。

この幹線が博多にかかって、福岡城下を抜ける支線を唐津街道、いま国道二〇二号線となる。

慶長五年(一六〇〇)、筑前一国を領有した黒田藩は、すぐさま福岡城の築造にかかり、城郭形成の東側を流れる那珂川に架橋して唐津街道を通し、これを橋口と呼び、街道の西出口を重開口とする両架橋を設けた。

この黒門口は、福岡城の濠割に樋井川を導水、その末端を博多湾に放流するためにした城濠の延長。これに城下を貫通する唐津街道の架橋を施工。橋手前の木戸門を黒塗りに仕上げたことで橋下の流れを黒門川、木戸を黒門口と呼んだ。

て城下の交通を両口に集中する目的を果たしている。

福岡城下は、江戸中期になると多数の武家屋敷のほかにも商工業者(町人)の城下商いも多く、これらは城下を通過する街道筋に軒を連ねていた。この街道には、所々に左右に切れる小路があり、これに職人町、大工町、通り丁などの町名がある。黒門口を西に出る街道筋、約百米を唐人町と呼ぶ。その昔、唐人が居住したという伝説が町名の由来である。

唐人町通りの右北側は武家屋敷、左南側に商家が並んだ。唐人町の突き当りに善龍寺の楼門が道を塞ぐように建つ。唐津街道は、この楼門前を左に直角に曲がる。これは城下に特有の迷路的な道づくりである。

唐人町通り、即ち、唐津街道が善龍寺正面の手前約二十米に小路が横断し、四ツ角をつくる。この右手前の角地に亀井聽因と南冥父子が町医を開業、これに南冥が教授する学堂と書生寮も建てた。

この亀井所有地は、広さ約六百坪(2千㎡)北側に浪人町と呼ぶ通り

があるので三面が道路になる堂々の構えである。北側の道を挟んで知行二百石の馬廻組高島家、亀井の東側に御典医(藩主に仕える医師)百四十石の香江家がある。

亀井父子の同地居住は、宝暦十四年(一七六四)二月からで、以前は同じ福岡藩領の早良郡姪浜村であった。亀井家は、さらに同国西部の怡土郡三雲村(現糸島郡前原市)の農家で自作田を持つ本百姓である。

聽因は、若年から福岡藩医の名家にされる鷹取家に奉公して啓発を受けながら古医方の技術を学んだ。

享保十一年、聽因二十三歳で主家を辞し、三雲村から姪浜に移り診療を開業する。

聽因の気性は進取に富むが情に厚く、人をよく遇し、貧富にとらわれない。医師として、当時の病者に多い迷信と因果を排した診療を行って人気を得た。

姪浜村は、唐津街道の宿場で交通と海運の便益があり、農業と海産の集散も盛んであった。

聽因はこの土地柄に三十八年、あまり無理をせず相当地の産を成したと思われる。

自宅内に客室「忘機亭」をつくり、訪問客の滞在に提供したという。これは聽因自身の見識を博くし、子女

教育にもなった。

以上でわかることは、聽因が生涯に三回の土地替りをしたことである。まず、先祖からの出身地を出る。

医療開業のため地域の農商と海運交易の中心地に進出。三十八年間の信用を得ながら、さらに藩政の首都である城下町に果敢ともいえる移動を行ったこと。当時の人生五十年とされたことから考えると姪浜村までは聽因一代の成功、福岡城下への進出は南冥と、その子孫にした大胆な布石と考えられる。

長男の南冥には、医師たる以前の教養を徂徠学に進めたこと。これによって医学は古医方に、それぞれに良師を得て効を積ませた。よって、本人も聽因も福岡城下に、いささかのためらいのない進出を果たし得たのである。

すでに聽因は六十一歳、己れが信奉した徂徠学、古医方であったが、田舎医者社会は窮屈な朱子学であり後世派が大勢を占めていた。

古医方は、中国医学の古い秦漢時代の親試実験を重んじる診療を基本にする。これは科学を信条にした医家要件にはかならない。思想的には古学派、徂徠学の古文辞学による。

後世派は朱子学の観念的思考による。このため病状に迷信要因があっ



ても、これを排除する科学性と治療を欠ぐことになる。

後に、人体解剖、或は蘭学受容をするのは古医方派に多かったのである。

父聰因は、南冥の医術もさることながら、経学と詩文の学を世に問わせること。詩文こそ、人の性情に自由と豊かさを

自身が果し得なかつた夢を南冥に待望したのである。幸いに診療は、親子二人で、なお代診を置く盛業を呈した。

学塾は、江戸中期以降、各藩は共通する藩制改革と人材教育を実学に求め、また農と商の富裕層は詩作教養を欲し、これらは徂徠学の教程を待望していた。

このため、南冥の学塾には各地からの書生に溢れ、また博多町人の有識層は南冥に詩文の添削を求めた。

まさに聰因の先見の明を外さなかつたことになる。

南冥に対する声望も高まった。南冥は、明和九年（一七七二）三十歳で結婚（夫人は脇山氏二十五歳）。明和元年、父と福岡城下に移って九

年目である。医業と学堂も隆盛の中で成婚の余裕を得たのであろう。

翌、安永二年（一七七三）八月十一日、長男昱太郎（後に昭陽と号す）出生。祖父聰因七十歳、祖母の徳



亀井 昭陽

（浄満寺娘）六十歳である。

昭陽にはすでに三姉があり、このために父南冥の前年妻帯は再婚とする説がある。

南冥の結婚については、『亀井家万曆家内年鑑に記録がなく、昭陽の三姉出生の記事もない。昭陽出生の記事に先妣二十六とし、母の年齢がわかる。』

亀井家年鑑は南冥が五年後の安永七年に福岡藩登用を得た以後は書き入れも多く正確になる。

翌々の安永四年。昭陽次弟の昇二郎（後に雲来と号す）が出生。

同年、熊本藩の藩儒として令名が高い「藪孤山」が来遊する。

孤山は「福岡府に亀井道載（南冥の字）の南冥堂を訪ふ。時に主人、新に書院を建て生徒日に進む。賦して祝す」と、記念の詩題を説明的に書いておりこれで亀井塾の盛況がうかがえる。

本稿の主人公「昭陽」の年少時の記録資料と伝承など、残念ながら未だ見聞にしない。おそらく寛政十年（一七九八）の大火に焼失したと思われる。

昭陽の実伝は、十三歳の成長を待たねばならない。

昭陽の号は、若年から長く使った

号である。一般に広く知られ、現代も呼ばれている。よって本稿もこの号で通す。後年、空石幽人とし、次で天山遜者を号し、月窟の二字号も時に使っている。昭陽の本名は昱、通称を昱太郎（いくたろう）とし、これが藩の士籍に登録される武士名である。字（あざな。元服のとき実名のはかにつける）は、元鳳である。

天明五年（一七八五）、昭陽は、父南冥が秋月藩主黒田長舒公に月例の進講を勤めるのに同行、藩主に拝謁し、父に支障ある時は、昭陽に代講を許された。

時に昭陽十三歳、以後再三の父代講をつとめ、公の信認を得た。

寛政四年七月十日、父南冥は突然藩命により終身蟄居の処分を受けた。これに伴い知行百五十石と儒者身分の剥奪、西学問所甘棠館惣受持兼教授職も追放される。南冥後任には上席訓導で亀井高弟の江上蒼洲が昇任、訓導の山口白貴、後藤主税に昭陽二十歳が新規登用を受け、十五人扶持を給されて訓導職に補充された。この扶持高ですると山口白貴らの上席になる。以来、昭陽は父親南冥の他人接見と文書交信も禁止という罰則の責任を負いながら西学問所の教職を勤めた。

能古博物館だより



能古の島吟行

◎姪浜川柳会(平成四・十・十五)  
鷹野 青鳥 選

観光を帰えして能古の波静か

八尋 いさを

コスモスへ渡船はどっと人を吐く

新 みさを

背丈越すコスモスのなか能古吟行

青木 きみえ

能古の島あわだち草も花を添え

吉原 たみ子

散策の胃の腑ほどよき能古うどん

大和 柳子

万葉の島染めあげる秋ざくら

末松 仙太郎

波しぶき心走らす能古の秋

谷川 定子

デッサン2千余 能古を

愛して画家逝けり

林 千代子

筑前風土記たしかに能古の上り窯

佐々木よしお

いわし雲 島の噂はつつ抜けに

中尾 好郎

使い捨てカメラへポーズ能古の秋

山下 英龍

於多福図 亀陽文庫の陽もぬくい

長崎 栄市

海の呼吸すいこむ

能古のライトブルー

原 敬道

陰陽石 思案の森のエトランゼ

吉原 湖水

眺望も御馳走のうち能古の島

板本 継生

もがり笛の碑が

見えますかりツ子さん

野田 はつ

世良崎 女は歌碑を読めと言う

原口 虎夫

砂出しの貝 手みやげに島を発つ

山口 由利子

烽火台誰が揚げたか穴一つ

吉富 とき代

能古の秋のぼる薊のひとえ帯

森 雷音

てにおはの謎ときはせぬ一雄の碑

鷹野 五輪

檀家留守 その戸締りを見て廻る

鷹野 青鳥

亀陽文庫・能古博物館友の会

【福岡市】天谷千香子③・西嶋洋子③・

岡部六弥太③・坂田泰益③・鬼塚義弘③・

村上靖朝③・片倉静江③・星野万里子③・

桑形シツエ③・速水忠兵衛③・亀井准

輔③・小田一郎③・吉村雪江③・財部一

雄③・橋本敏夫③・田上紀子③・三宅碧

子③・安松勇一③・上田良一③・西村忠

行③・高田浩二③・片岡洋一②③・桑野

次男③・玉置貞正③・山内重太郎③・星

野金子③・石川文之③・木戸龍一③・中

畑孝信②・黒川邦彦②・岩重二郎③・西

島道子③・吉原湖水③・原重則②③・石橋

七郎④③・藤木充子③・和田慎治③・森

藤芳枝②・金江たま子②・中村紀彦②・

西川真澄③・岡本金造②・青柳繁樹②・

荻原ヨネ②・横山智一③・末松仙太郎③・

板木継生③・行成静子③・池田邦夫②・

野間フキ②・浦上健②・宮崎 集②・都

筑久馬②・吉村陽子②・斎藤拓②・長

正彦②・鍋山駿一②・石橋観一②・桃崎

悦子②・西 正憲②・岩下須美子②・安

永友儀②・土屋正直②・磯崎啓子②・森

真吾②・三角健一②・織田喜代治②・甲

本総太②・大神敏子②・上田 博②・岸

洋子・大串梓・林十九楼・古賀清子・前

田静子・田中和子・近藤絃・長 八重子・

鶴田スミ子・井村明子・黒川松陽・谷

健太郎・伊藤康彦・中牟田正明・石橋清

助・田中寿夫・花田都子・塚本美和子・

日野和子・西尾弘子・間所ひさこ・原

重則・寺川泰郎・西尾健治・肥塚善和・

寺岡秀美・【大野城市】伊藤泰輔③・田

代直輝③・藤 穂積【春日市】後藤和子

【筑紫野市】横溝 清③・脇山浦一郎③・

川浪由紀子③・原 富子③【太宰府市】

中村ひろえ③・古賀謹二③・佐々木謙③・

吉田栗山子②・大谷桂介②・平岡 浩②・

西尾弘子②・【筑紫郡】結城慎也③④

【粕屋郡】神崎憲五郎③・榎田正己③・

榎田猶子③・酒井俊寿②・青木良之助②・

松本雄一郎・友野 隆・鈴木惠津子【宗

像市】大島成晃②・木村秀明②・益尾天

獄【甘木市】佐野 至③・酒井カツヨ③・

具嶋菊乃③・宮崎春夫③・井手 太①

③・田中トクエ②・富田英寿②【朝倉郡】

鬼丸雪山②【糸島郡】由比章祐③【飯塚市】

小山元治③【浮羽郡】吉瀬宗雄③

【大牟田市】嶽村 魁③・古賀義朗②

【苅田町】木下 勤③【北九州市】平野

巖②・片桐三郎②【久留米市】庄野陽一

③・野田正明②・野瀬邦夫【直方市】山

本利行②【八女市】松延 茂②【佐賀県】

甲本達也②【熊本県】浜北哲郎③

【山口県】大塚博久②・平野尊識②

【兵庫県】大橋孝太郎②【大阪府】小山

富夫②②・前田敏也子【滋賀県】小堀定

泰②【愛知県】杉浦五郎②・庄野健次②

【神奈川県】中野晶子③【東京都】片桐

淳二③・山根貞与②・村山吉廣【千葉県】

森 久③【石川県】丸橋秀雄【宮城県】

田中信彦③【北海道】船越谷嘉一

【協賛(会)会員(個人)】

片桐寛子【福岡】③・中村 登【福岡】③

大里豊男【福岡】③・広瀬 忠【福岡】③

笠井徳三【福岡】③・永田蘇水【福岡】③

菅 直直【福岡】③・大坪正治【福岡】②

野口一雄【福岡】③・立石武泰【福岡】②

奥村宏直【福岡】②・荒木靖邦【福岡】②

早船正夫【福岡】②・安陪光正【福岡】②

浄満寺【福岡】②・花田加代子【福岡】②

沖 双葉【福岡】②・七熊澄子【太宰府】②

木原敬吉【飯塚】③・大久保津智夫【飯塚】②

庄野直彦【宗像】②・原田國雄【宗像】②

もちパレス俳句教室

10月23日能古吟行 講師 坪井芳江 作(順不同)



姪浜川柳会のみなさん

野胡桃や鹿棲みし日のはるけさに

坪井 芳江

野菊濃し段々畠の猫車

下川 満夫

蟪蛄の斤を振り上ぐ

古窯跡 倉光 徳政

島径の葉陰に爆せて椿の実

三木 照子

榎紅葉島の郵便婦が通う

田中 静子

オルガンの音色どこより島の秋

角光 寿代

石蕨咲くや杉の木山のバンガロー

嶋田 冬子

鹿垣を残す谿あり榎紅葉

山村喜美枝

榎紅葉してをり民家一二軒

福田 萬三

船音を背に読む歌碑や竹の秋

山嶺 幸子

ひよ鳴くや二八観音苔むして

川島 トク

モンゴルのおしよせし島秋ざくら

原 種良

土つけて島の土産のつくね芋

白木美津子

揺れ動くコスモスすけて島渡船

戸高 郁子 中村田鶴子

江崎正直(大牟田)②・緒方益男(佐賀)③

中山重夫(唐津)②・七熊 正(佐世保)②

七熊太郎(佐世保)②・伊藤 茂(芦屋市)②

小堀定泰(滋賀)②・西村俊隆(東京)③

白水義晴(東京)②・多々羅幸雄(千葉)②

会員ご氏名に③は、会費ご継続三年目をいただいたしるしです。

(一)は多年分のまとめお払い込み、(二)は増口数ご負担を示します。

【協賛会員(法人)】

流通 共済 (株)花田積夫(福岡)

タイム社印刷 (株)安部栄一(福岡)

株 笠 組・笠 忠夫(福岡)

博多ちくわ・株魚嘉・松尾嘉助(福岡)

権藤税理事務所・権藤成文(福岡)

協通 配送 (株)今林 昇(福岡)

大牟田運送 (株)南誠次郎(福岡)

山谷運送 (有)山谷悦也(東京)

株三島設計事務所・三島庄一(福岡)

西尾トラック運送(株)西尾秀明(福岡)

日西物流 (株)原 重則(福岡)

東洋特殊機工 (株)西尾敏明(福岡)

橋建設工業 (株)野村六郎(福岡)

愛宕建設工業 (株)野村六郎(福岡)

九州三菱ふそう自販(株)宮崎慶一(福岡)

(有)愛光ビルサービス・野田和禎(福岡)

(有)クリーン開発・野田和禎(福岡)

延寿産業 (有)池田邦夫(福岡)

※新規の御加入(先号以後、十月三十一日まで)は、右の地区ごとに記載いたしてありますので、何卒御芳名を御確認下さい。

ありがとうございます。

友の会 年間3千円

(館の活動、館誌購読と催事企画に参加)

自然と文化の小天地創造

能古博物館の会

協賛会(個人)年間1万円

”(法人)年間3万円

【金援助を受ける】

納入方法 郵便振替 福岡3160970

財団法人 能古博物館

右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。

【お願い】送金は振替用紙(送料加入者負担)をご利用下さい。用紙はご連絡次第お送りします。

当博物館の活動、また絵画・古文書資料など当館に皆様の「ご支援」をお寄せ下さい。

図書出版

『閨秀 亀井少梨伝』

詩、書、画の作品で仙厓の次が多いのが同時代の亀井少梨。しかも少梨には艶麗な漢詩の恋歌まである。これが同女の作か否か。これに始まる探究の書である。

B5版・表紙布装美本

限定 一、〇〇〇部

収録全カラー50頁・本文94頁

直売頒価 三、〇〇〇円

(送料 三二〇円)

### 加治亜委子さん回顧展

加治亜委子さん作品との出会いは谷口コレクションによる。

谷口先生の郷土性に満ちた多数作家の作品を飾るため、本館に並んで2階建一棟を新築。これに従来、本館の一室を占めた能古出身の画家多々羅義雄作品と共に新館棟に、専ら2階を谷口コレクションに、なお期別による入れ替え展示とした。この中で加治作品は大胆ともいえる色彩溢れる抽象で、多くの方々を思案させる作品であった。

このため同作品は継続展示していた。



「秋の庭」1969

今回、谷口先生の御提案で同作品の特別展となった。会期2カ月を月に分けての展示であったが、全作品を並列すると、画題の流れから認識が生じ、納得の嘆声も聞こえた。



「待ちわびて」1971

この作者の人生は短かったが、これだけ強烈な作品を現世に残されたことに、あらためて感銘を受ける。会期中、家族の方々の思いやり、絶えぬ生花の飾りによって、故人の作品と併せ、館も花やぎに満ちた感である。

谷口コレクション以後、多数作家による作品14点の寄贈を得、お陰で現代郷土美術常設棟に予期しない賑あいが見られる。

### 寄付受領の明細

(平成四年七月～十月末)

(絵画) 油彩20号「さわら炭鉱」

昭和22年作・額装付。

寄付者 早良区室見4-20-2

中村幸雄様



(註) 中村さんは、少年時代から画

作好き。現創元会員。80歳でなお現役、昨年は新天町の村岡屋ギャラリーで新作発表(個展)された。今回の寄付作品は、姪浜「さわら炭鉱」戦後の復興に活躍した中堅炭鉱の一つ。地元であるため勤務された方も多く、作品の前で「なつかしい」と語られる情景も見受けられる。寄付された中村さんのお気持ちも通じ合うようである。

(図書)「資治通鑑・全百四十八冊」全揃い本。

寄付者 西区姪浜3-11-21

石橋観一様

(註) 本書は、北宋の司馬光の著。戦国時代初めから五代末にいたる一、三六二年間の編年体で記述した歴史書二九四卷一四八冊本。積み重ねると大人の身長を越える。大冊のため本書専用の本箱を作るほど。よく欠本の多いことで知られるが、本書は題簽もよく残る。天保七年、伊勢津藩の出版で紙質も良く本紙に損傷は殆どない。石橋家は、亀井昭陽と妻姉妹で無類の昭陽支援である。今回の少栗展にも御寄付と少栗書など寄贈をいただき、なお今回は文庫の漢籍充実を得た。

### ・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)  
休館日 毎週月曜  
(月曜日が祝日の場合は次の日)  
12月29日~1月2日  
入館料 大人300円・中高生200円  
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)  
→能古(徒歩5分)→博物館  
〒819 福岡市西区能古522-2  
☎(092) 883-2881・2887  
FAX (092) 883-2881